

# 時論



早稲田大学大学院  
教授  
川本裕子

謙虚に学ぶ姿勢

日本は古くから、外来の概念やものをたくさん取り入れ、それをうまく吸収しながら、発展してきた。文字がその最初の好例だ。中国の漢字を使い続けながら、その漢字から表音文字の仮名を創造した。両者を組み合わせて中国から由来した宗教、思想、諸制度を見事に日本化した。また、リバース・エンジニアリングに古くから長けていて、種子島に鉄砲が伝来してから数年内に自力で生産できるようになり、戦国時代の重要な戦いで大量に使用されるに至った。

明治維新後の近代化も西洋の技術と制度の急速な吸収の過程だった。そこで現代に至るまで顕著なのが、いわゆるカタカナ語の活用による外来概念の表現だ。デジタルトランスフォーメーション、フィンテック、テクノロジー、ベンチャー……など、今の日本語は、カタカナ言葉

に満ちあふれている。日本の知的世界が世界に開かれていて、ある種の「証」のようなものだと、プラスに評価もできよう。その反面、カタカナ言葉が日本人の英語習得をかえって妨げている恐れはないか、という指摘もある。

もちろん、日本語と英語は構造がまったく違い、米国務省の資料によれば、英語ネイティブがフランス語やイタリア語などの言語を習得するのに必要な時間は600〜700時間だが、日本語だと3000時間ほどかかる、とする。ここからすれば、日本人の英語の習得に時間がかかるのも当然かもしれない。ただし、アジア諸国にも差をつけられている現状は、言語体系の違いだけでなかなか説明しにくい。

なぜカタカナが英語習得に悪影響を及ぼすのか。日本語の子音には母音が付いている。例えば「English」は2音節だが、カタカナで書くとイ・ン・グ・リッ・シユと5音節になり、英語をカタカナで置き換えて学ぶと、まったく違う発音になってしまふ。「digital」は3音節だ

が、日本語で書くとデ・ジ・タ・ルで4つの母音の着く言葉になってしまい、スピーカーマーケットは日本語では9音節だが、英語だと4音節といった具合だ。

要するに、カタカナ英語が脳裏から離れず生半可に安心してしまうので、本当の英語に切り替えられず、習得が妨げられているのではないか、という懸念である。この話を先日講義でしたら、「英語とカタカナは違うと、もっと早く教えてほしかった」と学生たちが言っていた。若い世代には期待したい。

デジタルイノベーション、ESGインベストメント、サステナビリティなどについての、世界の先端的な議論と日本のギャップはしばしば痛感する。コーポレートガバナンスも然りで、アジアの中でもマレーシアと並ぶ5位(Asian Corporate Governance Association)と、日本が先進的であるという時代はとうに終わっているのだが、カタカナ言葉の存在によって、そこら辺の感覚がビビッドに日本国内に伝わってこない。ともすれば、「日本型〇〇」と言って安心してはいる傾向も根強い。

海外からCEOを招聘する会社も多くなっている時代だ。カタカナ依存から早く脱して、海外とダイレクトに知的に交流し、学ぶべきものは学ぶという日本本来の謙虚な姿勢を取り戻すべき時ではないだろうか。